

学会ニュース

日本女性学会

第7号 1981年7月

第2回総会報告

6月7日(日)は梅雨模様のうっとうしい午前中であったが、法政大学62年館211番教室では、昨年に引き続き、日本女性学会の第2回総会が熱心におこなわれた。

冒頭に駒尺喜美代表幹事から次のような挨拶があり感銘ふかかった。

「日頃の私の思想信条からすれば、このようなところ(筆者注、学会の冒頭の言葉)に立ちたくないと思っているので、今日ここで挨拶することについても、ゆうべだいぶ考えていた。しかしこれは「女性」の学会だから、女性の問題に限っては別だと思ってここに立つことにした。現在われわれ「おんな」をとりまく状況は、保守化の傾向が強まっている。しかし一方ILOでは昨年のことだが、男性も家庭責任を負うべきだという決定があったりして、明かさと暗さがせめぎ合っていると思う。また私の意見では、ジョン・レノンが殺されたのは女の状況を象徴していると思う。レノンは少なくとも男性が女性とともに自己を解放して行こうとする方向をとっていたと思う。しかしそういう立場はどういうわけかやっつけられやすいので、殺した方は右翼っぽいというか、男の反撃という形ででてきたと思う。実際にあの犯人がそのことを意識してやったとはいえないが、結果的には男性のまき返して、現代という状況のなかからあのような事態がおこったといえると思う。新旧せめぎ合う中からのあらわれとして、「主夫」になる男の人がぼちぼち実在してきたといえる。ここ1年の保守化のなかから、すこしは前進しようというきざしもあるといつてよいのではないだろうか。この総会のために幹事会が会員におこなったアンケートにしても、めだった活動や華やかな動きを願うのではなく、じわじわと力を蓄えて行くという方向がみられる。とにかく頑張っていきたい。」

次いで杉山秀子幹事よりこの1年の本学会の経過報告がおこなわれた。「会員数約115名。公開シンポジウム、研究会など4回おこなった。入会者登録カードを回収し、名簿を印刷した。アンケートもおこなったが回収率がわるい。アンケートのなかで研究発表は会員相手におこなうのがよいという者が半分、シンポジウム形式がよいという者11名、本年発表できる者が4分の1、学会誌については30名が賛成、3名が反対、書く用意のある者が19名であり、学会誌の掲載料を発表者が負担することについては、やむをえないとする者が半数であった。ニューズレターは好評で、規約についての意見は、人間解放16名、女性解放がよい5名、両方を盛りこむ2名、別の意見14名であった」などの内容であった。

さらにアジア地域女性学従事者のリスト作成について、漆田和代幹事より、経過の説明と協力の要請がおこなわれた。会計報告は松原純子幹事より、並に会計監査報告が池上千寿子氏よりなされた。また、81年度活動方針と予算が、小林富久子幹事より説明された。これにより、会活動の年間計画化が決まり、6月第1週の日曜日に総会、9月、12月、3月の第1週目の土曜日に研究報告会を開くという、およそのめどが示された（もちろん、会場などの関係で多少ずれることがありうるが）。ニューズレターの発行もこれまで通り年4回とすること、学会誌については、予算と実務に携わる人手、また発表の用意ある会員数の実状などから検討中であることが、報告され、承認を受けた。また、名古屋市立女子短期大学より「女性論」の教員公募の通知のあったことが紹介された。

さらに、昨年度の総会でベンディングとなっていた日本女性学会規約2条の審議が行なわれた。米田佐代子幹事より、昨年提示されていた「本会は人間解放の視点から女性学の確立をめざし、そのための研究および情報交換を行なうことを目的とする」という案の代わりに、「本会はあらゆる形態の性差別をなくし、既成の学問体系をこえた女性学の確立をめざし、そのための研究および情報交換を行なうことを目的とする」という案を、幹事会原案とする旨の提案と説明が行なわれた。種々議論があり修正案も論議されたが、結局幹事会案が可決されることとなった。ここに日本女性学会の規約は、この2条を含め、すべて整うこととなったのである。ただ、幹事会案が、あらかじめ総会の前に提示されていなかったことへの不満、4月始めのアンケートの結果が今回の原案に十分に生かされていないと考える見解、また「あらゆる形態の性差別をなくし……」の字句をめぐって、性差別のみを重視する態度だと見る見解、必ずしもそうとすることはないとする見解、「既成の学問体系をこえた」とは何を意味するかという疑問などが次々として出され、短時間のうちで十分に討議が尽くされたと言え難かった点が惜まれる。出席者各自に問題は様々な形で残されたであろう。が、残されたところから明日へ向って出発したいという意欲が熱っぽく湧き上り、悪い結果ではなかったと思われる。2年とも総会の司会をした責任上、この会員全体の情熱を救いと希望の旗印として、今後ますます努力したいと決意したことを記し、記録と報告に替えたい。（文責 野口栄子）

講 演

日 本 文 化 と 女 性

津田塾大学 ダグラス・ラミス

どうして男が女性学に興味を持つのかという質問をよく受ける。私は津田で西洋政治思想史を教えている。教える目的は歴史の暗記ではない、社会の中でどう生きるか、どういう社会を作っていくべきか——という市民意識の涵養である。女が一人前の市民になりうるということを前提にしない限り、私の教育は成り立たない。例えば、就職試験では私のゼミの学生も、必ず、女性問題についてどう思うか、入社したら能力を活かした仕事をしてもらおうとしてももしお茶くみを上司に頼まれたらどうするか、などときかれている。就職したいならどう答えなければならないかを、どんな女子学生も知っており、内心深く脅えている。これは一種の思想検査である。この恐怖がある限り、本当に関心を持ってつきつめて学ぶということができない。私が公害や南北問題を取りあげようと、

学生は途中で立ち止まってしまう。私の仕事を妨げている今日の女性の問題そのものを、避けて通れなくなったというのが、一つの理由である。

もう一つは――。歴史はどういう風に発展したかを知りたいのなら、歴史の中での女性の役割や機能を取りあげない限り、本当のことがわからないからである。私は博士論文で近代化論、産業化におけるイデオロギーのことを取り上げ、産業化によって仕事はどのように変わったかについて数百ページの論文を書き上げた。そのために読んだ多くの書物にも、私の論文にも、男における産業化しか書いてなかったことを、最近になって気がついた。株式会社をつくるとか、都市化するとか、軍を作るとか、産業化における男の経済組織の発展のことばかりが書いてあって、産業化の中における女の役割、女の生活、家族の生活がどのように変化したかについては、関心を持たなかった。私が言いたいのは、産業化の過程では女も一生懸命働いたのだ、というようなことではない。

産業化とは何であるか、最近になって私が気がついたことは、女の仕事を男が奪い取る過程だったのだ、ということである。昔の家族は工場ともいべきもので、さまざまなものを生産していた。例えば100年前のアメリカでは、台所はとても大きく、カンヅメやハム、ベーコンなど食物を作るのはもとより、羊の毛を刈って糸にし、織り、洋服にしていたのだし、石鹸や道具やおもちゃまで家で作っていた。男も女も作っていた。象徴的なことに産業化が始まったのは、イギリスの繊維産業においてであった。工場の発明こそ、それまで女のものであった仕事を男のものにする組織であった。工場と株式会社によって、女の仕事は一つずつ奪い取られ、残っているのは、掃除、せんたくなどの家事と育児であり、最後まで残るのは育児ということになりつつある。専業主婦というのは産業化の一つの結果であり、産業化が女と子どもしかいない家族を作り出したのである。

専業主婦、専業主母は、朝から晩まで、1人か2人の子どもとハチの巣のように区切られたマンションで暮らしている。夫は夜遅くしか帰宅しない。これを子どもの立場から見ると、2、3歳ぐらいまで殆んど母親としか顔を合わさないで育つということになる。母の存在はものすごく大きく、愛と憎しみのからんだ複雑な親子関係となってしまう。そうでなくとも2、3歳までの幼児にとって母親の存在はとても大きいと、フロイトは言ったのだが。

ここで日本文化のことに触れてみると――。日本は男性天国と言われ、男性が権力を握っていると言われる。と同時に、日本は母性社会だとも言われ、本当は女に権力があるという説もある。どちらが強いのかを競い合っても仕方がない。両説とも正しいのだ。悪循環だと思う。

20年前日本に来たばかりのとき、電車の中でサラリーマンの洋服の着方を見て、強い印象を受けた。真白のワイシャツで、ボタンをきちんとはめて……。アメリカ人の目から見ると、アメリカ文化の中では、そのような洋服の着方は、母親から独立できていないお母さん子であることの証拠のようなもの。母親に着せてもらったように奥さんに面倒を見られ、ネクタイまで結んでもらって、行ってらっしゃいと送り出されたような。こういう人たちが、ジャパン・アズ・ナンバー・ワンとなっている株式会社の組織を作った！ 誇張して言えば、株式会社という男性組織を作って、女の権力からの逃げ場とした、と言ってもよい。株式会社があれば、家の中でも、その権力をバックにして女に対抗することができる。仕事だから、忙しいんだから、と。そうしてその組織を使って、女の仕事をとり上げ、その結果、専業主母の存在をますます大きくして、その母から離れるのを一層

難しくしてしまう。悪循環なのである。

最後に女と戦争というか、軍隊組織について話してみたい。男の原理からでき上がった組織の一つは株式会社だと言ったが、軍隊組織はその原理をとことんまで追求したものである。男ばかりの組織の中で兵隊たちが四六時中考えているのは、皮肉なことに女のことなのだが……。

最近ある平和研究者がこう言っていた。戦争がいかに悪いものであるかばかりを研究していたのでは、戦争を防ぐことはできないのではないか。戦争の魅力についても研究する必要があるのだ、と。大変もったもだと思ったが、この人が完全に見落していることがある。これは男の間でのみ通用することで、戦争に魅力を感じる女はまずいないのではないか、ということである。

しかし、兵隊に魅力を感じる女は確かにいると思う。そのことを自衛隊募集のポスターを作る人たちはちゃんと知っている。ピシッとした制服のズボンをはいて股を開いてすわった男の側に、おしゃれをした女の脚が男にふれんばかりにより添っている。足元だけのこの画面に“自衛官募集”という大きな文字。制服を着ると性的な力が与えられると多くの男性は思っている。その魅力には2種類ある。自分の国の女性に対して魅力が生じるということと、敗けた国の女性が何らかの形で自分のものになるという隠された動機と。戦争の歴史を見てみると、勝って村や町に入ると、ものを取る、女を強姦する、ということが公然と行なわれていて、それが兵隊の給料のうちに入っていたとさえ言える。シェークスピアの『ヘンリー五世』の中にも出ている。

辞引きを引いてみると、rape という語は「強姦」という意味の他に、(戦争で)「虐殺すること」(強姦を含めた)という意味を持っている。violence(暴力)のもととなった violate という語は「法律を破る」「道徳を破る」という意味の他に「強姦する」という意味を持つ。force という語は「強制」「戦争」「軍事力」「軍そのもの」など何十の意味を持つが、「強姦すること」という意味も含む。日本語の「犯す」という語も、同様に多義的なものである。

このように、戦争をすることと、女性を強制することとが、語源的に結びついているところを見ても、戦争の原理と女性に対する抑圧の原理とが、現象として結びついていることがうかがわれる。だから、男の組織になっている平和運動、反戦運動が途中で終わっているのは、考えてみるべきことだ。男と女の問題を取り上げない平和運動というものは、どうしても途中で終わってしまうのではないか。

原理として戦争のありえない組織とか、戦争のための軍隊組織がどこにもない世界にあっては、男の存在が根本的に変わるのではないかと想像するのだが、今はそれ以上のことは自分にも言えない。

注)紙数の関係で文意中心に要約しました。「オッパイ飲んだらオトナになれる。イッパイ飲んだらコドモにもどる」とか「ウルトラマシには母がいる」など、機知とユーモアに富んだお話ぶり、自衛隊ポスターの話の際には壇上での実演つきという熱演ぶりを、お伝えできていないことをおわびいたします。なお、質疑についてはここには省略いたします。この講演の後、ラミスさんは日本女性学会に入会してくださいました。

(文責 漆田和代)

<研究報告> (以下報告順)

バーナード・カレッジの女性学

— セックス・ロールを中心として —

都立高校教師 福井 浅子

コロンビア大学の教養学部を担当するバーナード・カレッジは、1974年に女性学を開設しています。この女性学のコースは3分の2から、4分の3まで、学部外の学生によって選択されています。ちなみに学科目を紹介しますと、人類学では、文化の中の男と女の分析、性役割の分析、歴史では、アメリカの婦人労働の歴史、アメリカ女性史、政治では、性役割と社会政治、経済学では、アメリカの婦人と経済、性差別と経済、心理学では女性の心理、フェミニスト比較考察、社会学では性役割と社会、女と男 — 社会的状況 — 等が代表的なものです。

なかでも社会学では、恩師コマロブスキー教授の扱う¹⁾ Dilemmas of masculinity: A study of college youth²⁾ 『男らしさのジレンマ — カレッジ・ボーイの研究 —』というテキストをメインにし、各自基調報告を行ない問題点を出し合って討論をしたり、男らしさとは女らしさとは何かという課題が与えられ、レポートを提出し、外部からはプロフェッショナルな職業人を招いて、職場の現状を聞いたり、調査に出かけたり、バラエティに富んだカリキュラムが生まれ、学生の間で非常に評判が良かった。その人気の源は心理学的、社会的両面からのアプローチがなされ、各種の問題提起をしていることにあると思います。

即ち心理学的側面からは(1)性の悩みの³⁾緊張、(2)職業の緊張、(3)家族関係の緊張。社会的視点からは、(1)Role strain mode 役割緊張のモード、(2)5つのストレイン・モードが展開されているからです。報告者は、なぜSex Roleを学ぶのか、について例をあげ「一杯のコーヒー代をめぐって」男と女のどちらがコーヒー代を支払うかという心理的葛藤を分析しています。そこにはアノミー(曖昧さ)の状態がクローズアップされ、幾多の問題点があり、女性の論理の入り込む余地があると指摘しています。男はコーヒー代を払うことによって、女より優位に立ち、女を支配する錯覚に落ちいる。このような男の状況は許しておくわけに行かない。すみやかに性役割の源を探究し本来の意味を明確にさせねばなりません。

女性学は多学問と関連し学際的な研究を必要とされ、全人類の半数を占める女性の幸せのために存在するものですから、人種、民族、国家を越えて共通な問題に直面しているわけです。そこに文化人類学者マードックの言うクロス・カルチュラルな立場から差別されている女の状況を比較し真理を究明する必要があるのです。最近のアメリカの性役割は、職業の面では宇宙飛行士からホステス(戦争に加担することは好みませんが)、家事面では、男が料理、繕い、洗濯を、と変化しつつあります。日本人は外国文化の受容には迅速です。このクロス・カルチュラルな側面からの刺激は大きく、日本も性役割変化をするのはそう遠くないでしょう。

看護の本質と現実

— 看護婦は一生続けられるか —

浜松衛生短期大学 早田キヨ

私は看護短大で教鞭をとり、5年目になる。婦人がその生涯をかけて、自己の生きた証しとなりうるものを求めながら仕事を続けて来た半生であった。自分の生き様を我が子に、また学生に伝えられたらと考えての日々でもあった。この想いを教育実践の中でも生かしているが、しかし、学生の多くは、専門職業人として教育を受けながらも、卒業後、結婚や出産を境に離職していく者が多い。日本では、年々働く婦人は増加し、現在では雇用労働の3分の1を越すとされているが、婦人が家事と職業を両立させていくには多くの問題をはらんでいる事実を見逃すことが出来ない。特に看護職にある者にとっては深刻だと思われる。全国的な統計から見ても看護婦は30代以降にその約半数が離職している事からもわかる。(図略)

患者の生命を守り、高度な知識と技術を持ち、より良い看護を提供できるには、看護婦のもつ経験は重要となり、この離職の実態は、社会的にも大きな損失だと思うのである。私はこれらの実態を更に明らかにしていくために、当短大のゼミナールで学生と共に調査を続けているが、その内容を途中経過であるが、紹介してみたいと思う。

看護に求められるものは何か、ということを考える時、波多野梗子氏らは、次のようにまとめている。看護とは「様々な健康の段階にあるすべての人々に対して — その人々が特有な身体的、心理的、社会的な基本的欲求をもって社会に存在しているという認識のうえにたって — その人々の健康の水準を保持、増進するために、これらの基本的欲求の充足を援助する過程である」と。また看護偏理については、ナイチンゲール誓詞、看護道徳国際律に述べられ、加えて、ここ数年来WHOは「21世紀迄にすべての人々に健康を」というスローガンのもと、プライマリー・ヘルスケアを提唱している。このように看護者に求められる理念と、職業能力は年々深化され拡大されているのが現実である。当然ここでは、看護教育水準の向上と共に、看護者自身の人生経験の深さが強く求められて来ているといえよう。しかしながら、表の1～7(略)迄の実態にも見えるように、看護婦を一生続けたくても、出来ない問題が提起されてくるのである。1977年ILO第63回総会は、看護婦の労働条件の改善が、より良い看護へとつながり、広くは人類の健康と社会福祉向上のための重要なカギとなる、ということから、看護者の雇用、労働条件、並びに生活条件に対する国際基準の条約や勧告を行なった。

今日の看護婦の実態の中で、変則勤務体制、健康と母性保護、育児問題、賃金、卒後教師、再就職の問題等について我々は考えを深めてみた。詳細については紙面の関係で省略するが、人間らしい情緒ある生活とは、ほど遠いのが看護婦の生活サイクルである。また、健康保持の担い手になるべき者が、自らの健康管理も不十分なままでの母性破壊の実態は深刻で、他の婦人労働者と比べて、異常の項目をみると悪い状態を示している。慢性的な看護婦不足と相まって、産後の育児休暇さえ、取りにくいというのが実状である。退職理由で多いのは、結婚、次に続く育児の為というのがある。現在、我が国の全世帯の約6割以上が核家族という現状をみても、保育所の必要は必然であるが、

看護婦の勤務体制では、それだけでは不十分（夜間保育所が少ないため）であり、やむを得ず、一時的でもあれ、退職をせざるを得ないのである。当短大の近隣の某病院勤務の看護婦へのアンケート結果からも、これらの事は立証できる（資料略）。

以上から、結論として述べると、(1)今日の看護には、量と共に広く深い経験を持った質の高い看護内容が求められている。この際看護者が母親であることは大切な要件と考えて良いと思う。その場合、多くの問題があり、離職せざるを得ないという事である。(2)その反面、看護者の半数の人は30歳を過ぎてはなお、周囲の協力を得て、本人の職業への情熱が生甲斐へと繋がり、頑張っている事実がある。この事は後輩である者に大きな励ましとなり、問題解決に結びつけられる原動力となるであろう。

以上、考察は不十分であるが、今後私自身のライフ・ワークとしてこれらの事柄を研究し続け、共に働く看護職にある者達と歩んでいきたいと考えている。

短大は花嫁学校か

— 女性学入門実践レポート —

静岡県立女子短期大学 今井 泰子

このレポートは、ある地方公立女子短大の国文専攻生約30名が、1年間に女性意識をどう変容させたか、その報告である。前提には、日本の女性の異常な遅れを痛覚した私自身の留学体験があった。この女の地獄を変えるために、私に何ができるか。

帰国して最初の年（78年）、まず試みたのは、2年生の演習の時間に女に関する話題を折々雑談として提供することだった。結果はラチがあかないの一言につきた。2年目（79年）、1年生の必修講義「国文学史」を、文学を材料にした日本女性史に切り換え、女を呪縛している諸々の観念が如何に時代的産物に過ぎないか、それを教えることにした。一方、読書感想文の提出も求めた。モード・ヘッグ『スウェーデン婦人解放の手引』、原ひろ子『子供の文化人類学』、伊藤雅子『女の現在』。だがこの年も成功とは言えなかった。前の2冊は学生達にとっては所詮、海の彼方のお話に過ぎないのだった。とは言え最後の感想文が、これだ、と思える縮口を教えてくれた。再就職の困難性を知って不安を吐露する者が何人も現れたのである。

そこで3年目（80年）。各人の必要に即した本をそれぞれ指定して読ませよう、そう考えて、女性史の講義開始前に、各人の人生プランとその内実を問うアンケートを行なった。例えば再就職プランを持つ者には、さらに、その困難性について考えた経験のあるなしをただした。「状況にもよるができれば一生の就業を」を想定する者には、状況で家庭に入る時はその先どうする気か、と訊ねた。それらから、夢を捨てて家庭になじむ努力をすると答えた者には、さらに質問した。主婦、とりわけ子育て終了後の主婦が陥る寂寥感や懊悩について考えた経験があるか、と。また、「就業継続を望むのでそれが可能な配偶者を選ぶ」と答えた者には聞いた。そういう相手に出会えぬ時はどうする気か、と。「結婚はなりゆき、仕事こそ一義」という者には、結婚を無視する娘が周囲との摩擦で陥る不安や孤立感について考えた経験を質した。前提を問わず一生の就業を予定する者達

には回答させた。「女が仕事の世界で相応に満足ゆく場を得るまでに費す努力、時間、苦悩について考えた経験は」「家庭と職業の両立の難しさについて考えた経験は」。

短大生にせよさすがは現代娘、最初から専業主婦を考える者は皆無であり、できれば一生の就業をと希望する者が3分の2近くを占めていた。ところが、ところが、回答の細部を見ると、あれが駄目ならこれがあるサの後退作戦者、現実を考えた経験皆無の単純無想者が続出するのである。これでは、多くの女子学生がたちまち腰掛就業の花嫁候補者に変身するのは当然ではないか。日本の女性のライフ・パタンに関する諸情報を全員に与えて、人生観を再構築させる以外ない、そう私は思いなおした。

最初に84人の再就業奮戦インタビューを集めた、藤原房子『主婦が就業する時』を読ませたが、学生達が何より驚いたのはその困難さと悪条件だった。彼女達はあわせて、家事育児と仕事の関係についても考え始めた。2冊目に17人の第一線職業女性が発時の悪戦苦闘を語る本、有馬真喜子『女が開く仕事の世界』を勧めた。学生達は再び驚くのである。「輝やかしきキャリア・ウーマン」を目指すなら必ず要する大変な努力、社会の女性に対する門戸の狭さ。3冊目に袖井孝子・直井道子『中高年女性学』を与えた。大量の国家統計資料等を駆使し、中高年主婦の苦渋にみちた状況进行分析していく論考集であるが、優雅にして安楽な主婦というイメージを壊されて、3たび彼女達は驚愕した。学生達が混乱に陥りつつも変り始めたのはこの辺からである。如何に生きようと苦勞が避けられぬものなら、どう生きればよいか、と。

それゆえ最後に予定外だったが、次の3冊から1冊を読むよう指示した。困惑の整理や方向づけこそ緊急課題と感ずる者は、落合恵子『自分を生きる女の本』。生涯就業と覚悟の決まった者は、金森トシエ・岡田政子『女の就職』。結婚の問題点についてさらに考えたい者は、駒尺喜美『妻たちの復讐』。24名、5名、3名という選択数であった。「もっと私たちは自分を大事にするべきだ、愛するべきだ」「自分をおし殺してまでも私自身ただ男の人に仕えるのは嫌である」「一体あの人たち(=結婚出産退職する女性)は何のために生きてるのだろうか」「誰のものでもない自分の一度きりの人生を、私は後悔の残らない形で生き通したい」「女性が甘さを捨て、力を合わせてこれからの社会を変えていかなければならない」。いずれもそれぞれ別人の、最終レポートからの言葉であるが、彼女達は間違いなく変った。1年後に再度行なったアンケートで、31名中27名が前提はともかく生涯の就業を希望したこともさりながら、特に、次の項の回答に意識の変化が歴然と現われた。左側の数値が入学時、右側が1年後。彼女達の多くは、もはや正真、能う限り働きたいし、働ける条件を作りたいと考えてるに違いないのだった。

「家事は女の仕事」という考えについて

賛成だし、疑ったこともない	3	0
疑ったことはあるが、結局はその考えに賛成	10	2
反対だが、実際には女性がするしかないだろう	7	4
反対で、男性も相応に協力すべき	11	19
反対、男女ともに行なうべき	2	5

女にとって女性解放とは、理念以前に必要な問題だろう。自らの必要に覚醒するとき娘達は変る。

それには、日本の女が人生で会おう諸々の現実を偽りなく教えねばなるまい。

教育スライド『男子の性心理』 『女子の性心理』を製作して

教育評論家 北沢杏子

「私たちがあくまで必要としているのは指導者ではなく、目ざめなのだ。真の人間は自分自身のために考え、パートナーと共に寛容と理解をもって仕事をする。真の悪は、生き方を変えることを拒否し、旧態依然たるものにしがみついている人間なのだ」(ヘンリー・ミラー)。

『男子の性心理』『女子の性心理』の脚本を書いている間ずっと、私の脳裏を離れなかったのは、このミラーの言葉だった。大勢の中学生、高校生の中に入って行ってインタビューし、討論会を開き、質疑応答を繰返しながら録音を続けたのだが、その度に「この生徒たちに必要なのは目ざめなのだ」というミラーの言葉がきこえてくるのだった。

男子も女子も表向きは流行にあわせた行動のパターンを身につけているのだが、問題を問いつめていくと実に旧態依然たる考え方に縛られていることに気づく。そしてそれは、子どもたちを取りまく環境——両親や社会や週刊誌文化といったもの——の刷りこみによるものだという事もわかってくる。生徒たちはまだ精神的に成熟しておらず、恋愛体験も浅いので、性に関する情報や価値観などは、刷りこまれたままを発言しているのだが、発言しながら自己矛盾に気づく子どもも出てくる。例えば、男子が、「女はバカか。知性も思想も感じられない」と発言した舌の根も乾かぬうちに、「女が思想をもつのは危険だ。結婚相手には知性は不要」と答えてしまい、はっと首をすくめるのである。女子もまた、「女の甘えや色気は女の武器」とばかりそれを売り物にしておきながら、「でもあとで自分をいやな女だと思う」と自己批判を忘れない。このあたりに、刷りこまれたものから脱皮しかかっている小さな芽をみるのである。

少しものを考える生徒なら、ちょっとした助言や示唆を与えさえすれば、目ざめを獲得するに違いない。あるグループの男子の発言に、処女崇拜思想を、私有財産制＝家父長制の中に置いてみようとする考え方があって感心したのだが、これは倫社の先生の助言によるものだった。生徒たちが求めているものは、まさに指導者ではなく目ざめなのだと感じ入った次第である。

この仕事は脚本家の私にとっても、大きな目ざめをもたらしてくれたことを告白しなければならない。最初は、どこにでも見かける「男性の心理・女性の心理」「青年の心理と性行動」などの資料を読んですませるぐらいの軽い気持で取りかかったのだが、「男は積極的＝攻撃的、女は消極的＝やさしい」と、すべてが生まれながらにセットされているように書かれた心理学書には納得がいかなかった。といって、フロイトもフロムもユングももうひとつびたりこないのである。そんなこんなで、私は半年の間あらゆる資料を読みあさった。性差の心理や行動を、考える限り多角的にとらえようと試みた。大脳生理学の川上正澄、新井康允両教授、動物行動学の田所作太郎教授らのレクチャーを受け、日本女性学会の駒尺喜美、千葉康則、藤枝滯子教授たちと討論を繰返した。中でも後者は、私にいままでいない多大な影響を与えたことを告白しなければならない。そういう意味で、この高校生のための教育教材は、日本女性学会会員諸氏の思想を視覚化した最初の作品といってもよいかと思う。

この作品が、日本女性学会公開プログラムで上映され、多くの一般視聴者から絶大な支持を受けたことは、製作者の私にとってもこのうえない喜びであった。

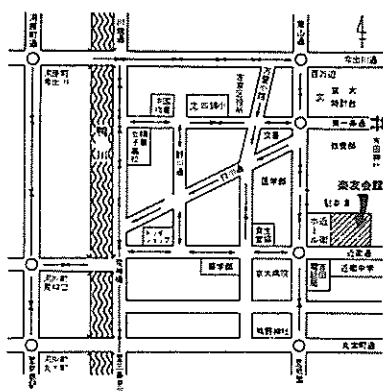
第 5 回 研 究 報 告 会 の お 知 ら せ

報告者とテーマ 亀山美知子(京都市立看護短期大学) 大山捨松の生涯

C・プロデリック(神戸女学院大学) 主婦作家について

日 時 9月5日(土) 午後1時30分～5時

場 所 京都大学楽友会館(地図参照)



京都大学楽友会館
住所 京都市左京区吉田近衛町
TEL (075) 751-1100

京都駅より市バス13番のりば(206甲)か、四條京阪(南座向い)より(201)(31)で、いずれも近衛通り停留所下車

会 費 500円

報告内容についての御連絡が編集部が届いておりませんので、詳しいことはわかりません。亀山さんは日本看護史を地道に研究していらっしゃる方。大山捨松とは、津田梅子らとともに渡米、陸軍大将大山巖と結婚、赤十字社篤志看護婦会などに尽力するところのあった人です。プロデリックさんの「主婦作家」というのはhousewife writerで、昨今の日本で主婦作家と言われている人たちのイメージとは違ったものだと思います。

<< 会 員 か ら >>

私の提案

雑 賀 文 香

第2回総会に出席させていただき有難うございました。総会の感想を忘れないうちに述べさせていただきます。もちろん、ラミスさんの講演は面白かったし、研究発表の方々も立派でした。飛行機の都合で最後まで居られなかったのはとても残念でした。つくづく東京の方々

らやましく思われました。でも、こんな一般的なことでなく、私は枝葉のことを言いたく筆をとりました。2つのことを提案したいのです。①日本女性学会では、先生と呼ぶのをやめて、皆"さん"付けで呼ぼう。この会は学校の先生ばかりではないはず。先生、先生と言うのは国會議員を連想していやらしいし、女の間に階級を造るように思えます。皆平等に○○さんでよいと思うのですが、いかがでしょうか。

②夫や子のあるのを自慢するのはよそう。(というより)福井さんの発表のとき、会場からおじいさんが、「結婚しているか」とか、「どういう理由で離婚したのか」とか、とても失礼な質問をしたので腹が立ちました。発表者が男性だったらこんな質問をするでしょうか。公開の席でプライベートなことを聞くのは、「どんな立派な活躍も母にならない女には値打ちがない」とこのおじいさんは信じておられるようでした。その裏返し、後の発表者、今井さんの表情でした。始めから、「48歳、独身です」と居直っておられました、日本の社会がオールドミスを軽蔑し、いかに圧迫して来たかのサンプルを見る思いでした。女に夫や子のあるのがそんなに立派なことでしょうか。私の言いたいのは、今あるその人自身の値打ちで女性を見るべきだということです。女性を母かどうかで区別するのは、もういい加減でやめたらよいと思います。特に、日本女性学会ではそういう雰囲気作りをしてほしいと存じます。

注)会員の方からの御投稿をお待ちしています。

(編集部)

会員の著作

最近発行された会員の方々の出版物を御紹介します。なお、ほかに会員の方々が書物を出版される方、される方、事務局に御一報くだされば御紹介させていただきます。献本歓迎!

○ウルミラ・パドニス、インディラ・マラニ編、鳥居千代香訳『世界の女性 — 幻影と現実』家政教育社、1980年刊、2,500円。

○女性学研究会編『女性学をつくる』勁草書房、1981年刊、1,800円(日本女性学会会員でもある井上輝子、田中和子、館かおるさんはじめ計13人による共著)

○女性社会学研究会編『女性社会学をめざし

て』垣内出版、1981年刊、2,900円(日本女性学会会員でもある井上輝子、田中和子さんをはじめ計8人による共著)

○アレックス・マドセン著、藤枝滂子訳『カップル — サルトル・ボーボワール2人の旅』新潮社、1981年刊、2,300円

○『思想の科学特集：女性学入門』思想の科学社、1981年7月号、580円(日本女性学会会員では駒尺喜美、水田宗子、松原純子、田中和子、河野貴代美、米田佐代子、小林富久子、白井堯子、藤枝滂子、岸野淳子さんが執筆)

○田中由布子著『女性被支配者階級の経済学』女性経済研究会発行、五月社発売、1981年刊、1,500円



事務局から

◎会員数は1981年6月末現在で約120名です。3月末に名簿を作成いたしましたので、その後入会された方が名簿に載るのはこの次の機会となりますが、入会が認められてから事務局からお送りしている会員登録カードは必ず御返送下さい。また、先の名簿の誤り、記載事実のその後の変更なども、ございましたら事務局まで御一報下さい。

◎ニューズレターにほほ毎号載せてきた「入会について」の替りに、「日本女性学会への入会の御案内」を作成いたしました。その実物を一部同封いたしますが、お知り合いに入会をお勧めくださるのに役立てていただきたく思います。余部はたくさんございますので、必要な方は事務局の方へ御連絡ください。新しい仲間をどんどんお迎えしたいものです。

◎第2回総会で会活動の年間計画化ということが言われました。特に、研究報告会の御案内がニュースに載ってお手元に届くのをもう少し

早めてほしいとの御希望が強く出されておりました。ニュースの回数をふやすことは種々の事情で今はできません。その替りという意味もあって、研究報告会などの今後の計画をあらかじめ提示しておきたいと考えています。

第6回研究報告会 報告者 桑原糸子(中央大学大学院) テーマ フランス革命期のフェミニズム — コンドルセのフェミニズムを中心に — 日時 12月5日 午後2時から 場所未定(詳細はニュース8号)

第7回研究報告会 報告者 江原由美子(東京都立大学) テーマ 個の凝視からの共同性 — 70年代リブ運動の求めたもの — 3月を予定しているが、日時場所は未定。

◎先日の公開プログラムでその一部を上映した「男子の性心理」「女子の性心理」のスライドとカセットテープの一式を、北沢さんが日本女性学会に寄贈してくださいました。事務局に保管しておりますが、希望者にはお貸しいたします。性教育材料として有意義と思しますので御活用ください。なお、スライドの上映時間は各40コマで各50分程度。貸出し料5,000円。

◎『思想の科学』1981年7月号の「女性学入門」特集は、もう御覧になりましたか。多数の本学会会員が執筆していること、多分野にわたっていろいろな傾向の筆者がバランスよく配され、広く女性学全般を見渡してみるのに便利であること、値段が手頃であること(580円)などから、ぜひ御一読をお勧めいたします。書店で購入できる方はそうしていただきたいと思いますが、別に学会の方でも在庫をいくらかブールしておくことに決めました。事務局あてに送料こみで600円分の切手(60円切手か100円切手が望ましい)を添えてお申し込みくだされば、後ほどお送りいたします。

◎実は幹事会はこの『思想の科学』をすべての会員に配布することまで検討してみました。年間4,000円も会費を払っているのに見返りがとても少ないという声をちらほら耳にしていたので。学会誌を刊行できればその不満は解消されるかもしれませんが、ニュースレターも今程度では、とても会員の御要望に応え切れるものではありません。各会員がどんなことを考えているかを知らせる一助にもなるし、何より現物を手渡されるメリットは大きいではないか、という意見が強力に出されたのです。昨年度の黒字分でまかなえる範囲内の出費だということもありました。しかし、それを思いとどまった

のは、①たとえプラン段階から会員がコミットして作った雑誌であるとはいえ、一般市販されている他の雑誌をもって流用することはスジが違ふ、②会費の使途として好ましくない、特に既に購読している者にとっては、ムダな出費でしかない、その他その他、数々のことを考え合わせてのことでした。こんなことをここに書いたのは、サービスが足りないと不満気な会員への言いわけではなく、会員数が増え、熱心な会員によって会活動が担われるようになって、早くこんな議論をしなければならない状況を脱したいものだ、ということでもあります。口をあけて待っていてもダメなものですから、各位の位置にいてできることで、ぜひ御協力いただきたいという気持ちを、お伝えしたかったのでした。

◎ニュースレターの編集を手伝ってくださる方を募ります。当面総会や研究報告会に出席できない会員にとって、唯一の会とのつながりを確保するものはこのニュースであろうと思います。その編集は現在、実質的には1人でこなしていますが、担当の漆田幹事より、東京近辺で協力してくださる方を募りたいとの希望が出されています。今までのような会活動の記録、お知らせ、会員便りという性格にとどまらず、内容の一層の充実をはかって行くためにも、志のある方のお申し出をお待ちしています。事務局または漆田さん(03-874-2478)の方に御連絡くだされば幸いです。なお、もう1人の担当者野口幹事(京都)には、御苦勞ながらこれまで通り随時御尽力をお願いすることにしてあります。

◎1982年7月27日から8月4日まで、カナダのコンコルディア大学において「女性に関連する研究と教育国際会議」が開催されることになりました。同大学はカナダにおける女性学の一大センターですがこのたび会議開催についてのアンケートを送って来ました。この会議は昨年のコペンハーゲンでの女性学フォーラムの後を受けたもので、ユネスコとカナダ政府が後援することになりそうです。詳しいことは今後のニュースレターでまた御紹介します。

編集後記

今号は思いのほか手間ひまがかかった。会員諸氏はどんな気持ちで目を通してくださるか。窓外に揺れる白い夾竹桃の花に心慰められながら筆をおきます。

(漆田)